
時の翳り

柚 雨深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の翳り

【Nコード】

N5623H

【作者名】

柚 雨深

【あらすじ】

交通事故で高次脳機能障害となった彼との再会は、私がヘルパー2級取得のために実地研修に訪れた生活介護施設だった。ある日突然と消えた彼、登校しなくなり病気だと噂は流れたが、交通事故だとは私は知らなかった。中学三年の時、私の初恋だった人、その彼が5年後の今、ここで生活している。心が動かないはずがない。動揺、恋愛感情、哀れみ悲しみ、その正体は自分にもまだわからない。

ブローグ

交通事故の後、高次脳機能障害となった彼との再会は私がヘルパー2級取得のために実地研修に訪れた生活介護施設だった。他の生まれながらに生活支援の必要な入所者とは違い、彼は中学まで地元では有名な野球選手だった。甲子園にも出場する有名私立高校からもスカウトが来ていたのを、私も知っていた。その彼がある日突然と消えた。登校しなくなり病気だと噂は流れたが、学校の違う私は交通事故だとは知らなかった。もう5年も昔の話だ。

その彼が今、私の目の前で車イスに乗り、唯一自由に動く左手でコップに入ったハブラシで遊んでいる。それは遊んでいるのではなく、何かの拘りで自分が納得するまでハブラシをコップの中で動かす彼独特の行動とのことだった。

小学校高学年から中学三年まで私の憧れだった人、その彼が今ここで生活している。心が動かないはずがない。動揺、恋愛感情、哀れみ悲しみ、その正体は自分にもまだわからない。

高次脳機能障害となった彼、中学2年の学園祭で1度だけ話しをしたことがあった。現在、障害1級の認定を受けている彼は私のことを覚えているだろうか。短い研修期間が始まるが、私の気持ちは既に彼のことに惹き付けられている。

彼が最後に私に掛けてくれた言葉は「ありがとう、またな」だった。
・

01・再会

北東北の私が住んでいる人口10万人の小さな街は、今年の夏、野球で熱くなった。

高校野球と大学野球それぞれ全国大会に出場し、惜しくも優勝は逃したが甲子園も神宮も準優勝という成績で終わり、久し振りの明るい話題で地元は沸いた。

甲子園に出場した高校は私の母校、OGの私にも同窓会が野球部のために作った俄後援会から寄付の案内が郵送されて来た。

大学の野球部は父が大学のOBで、かつ野球部のコーチをしている関係で私の家族はより熱くなり、母と私は試合の応援に神宮まで駆けつけた。

準優勝ではあったが父は満足した様子で、今夜もその試合のビデオを見ながら、大好きなビールを少し飲み過ぎている。

「そう言えば、詩織が中学の時の有望選手何と言ったかなあ、将来うちの野球部に欲しい生徒がいたけど、あいつどこの高校に行ったのだろうな」

父が急に、思い出したように聞いた。

私の顔を見ながら聞くので、私に返答を求めているのだろう。

「青雲の佐藤くんのこと？・・・三年の時に学校に急に来なくなって病気だつて聞いたけど、詳しくは知らないわ」

「そうなのか」

父は有望選手と知ってはいたが、その他の事情は知らない様子だ。野球部でスカウトも検討していたのなら知っていても良さそうな感じだが、高校生の野球部しか追っていないなかったのだろうか。

そこに母が横から口を挟む。

「その子ってほら、あの子じゃない。背の高い詩織が好きだった子。一度家に連れて来たじゃない」

「お母さん、そんな昔の事、バラサないで」

「そうなのか」

我家にも一度来た事があったが、父はちょうど春の野球部のキャンプで、約1ヶ月間の南国沖縄で留守の時だった。

父も酔っている為か、今夜はいつも無視する話に参加してくる。

「私が詩織に、将来プロ野球に行くかも知れないから、ツバをつけておいたら、と言ったの」

「確かに、可能性はゼロではないよな。今年だって甲子園の準優勝投手は高校生のドラフトの目玉だし、うちの大学の野球部からも1人ドラフトで入りそうだしな。惜しかったな・・・」

「何言っているの、お父さんまで」

そんな話をしながら、父に付き合い一緒にビールを飲み、父の大学

の試合のビデオを観たのはつい先日だった。

田舎の街とは言っても野球で日本中から注目を集めたことが、父には本当に嬉しかったに違いない。父の機嫌の良かった事と、昔の思い出に多少浸った夜だった。

今考えると、彼も交通事故などに遭わず、順調に高校へ進学して野球を続けていたら、今年父の大学のチームの試合にも出て話題の中心に居たのかもしれないと思うと、少し気持ちが沈んだ。

生活支援施設「にれの木」の研修初日、簡単なオリエンテーションがあり、その後施設内を見学して廻った。

彼、佐伯友之との衝撃的な再会はその時だった。

午後4時半、20名の入所者が食事のために手洗いを済ませ食堂に集まっていた。佐伯友之は1人だけ車イスに座り、彼専用のテーブルの前で、デジタルの時計と向き合っていた。

「佐伯友之さんは拘りがあって、支援は本当に困難なの。友之さんの拘りに付き合っていると他の入所者の世話が出来ないので大変なのよ」

私の研修担当指導員の斉藤さんが、友之のテーブルの上の時計を見ながら教えてくれる。

「友之さんはどういう訳か数字の9に拘りが強い。覚えておいてね」

彼は車イスに座り下を向いて、膝の上のティッシュを丁寧に折りたたんでいる。手を洗った時に感染防止の為、タオルの変わりにこ

ここでは1人1人紙タオルで手の濡れを取っている。体力的にも弱い人が多いので、危険は出来るだけ避けているのだ。

その手を拭く紙に友之は今何かを思い、拘っているのである。今の状態は、とても彼に話かけられる雰囲気ではない。他人を寄せ付けない自分の世界、佐伯友之の不思議な世界がそこには存在した。

斉藤さんが友之に向かい、話し掛ける。

「佐伯友之さん、食事の前にお薬飲みましょうね」

そう言つて斉藤さんが薬を顔の前に差し出すが、飲もうとする態度は示さない。

ここの入所者は友之を除き、自分1人で薬を飲める人間は誰もいない。全ての入所者は支援者の行動を見て声を聞いて口を開け、そして行動を起こす程度だ。条件反射の様な反応を起こすのだ。佐伯友之を除き入所者の知識レベルは3歳以下程度と言われている。

「お薬ですよ、口を開けて」と、言つと口を開ける程度だ。

だが、佐伯友之は1人違った。彼は中学3年まで普通の生活をしており、他の入所者よりは判断レベルはかなり高いと判断されている。

しかし、彼との意思疎通、とりわけ彼の説得は殆ど不可能に近いレベルとの事だ。拘りを越え彼が納得しなくては、彼の行動は何一つ進まないのだ。高次脳機能障害の彼の意味と拘りが、毎日の生活支援をする職員の手を困らせ、その都度対応を考えさせられている。机上での勉強など役に立たない現場の苦悩が、ここに存在する。

「あの、あの」

佐伯友之が私を見て、笑っているのだろうか。何か言いたそうに、

私には意味不明の意思表示を、誰かに向かって起こしている。おそらく一番近くに立っている斉藤さんと私に向かってであろう。昔の私の事を覚えているのだろうか。

「友之さん、今日からお世話してくださる田中詩織さんですよ」

研修担当の斉藤さんが話かける。

「あの、あの・・・」

佐伯友之の発言を無視し、斉藤さんは食前の投薬の準備をする。彼の問い掛けには返事はない。いつもの事に対応出来ないとも言いたいのか、それとも行動パターンを全て理解しての行動か、その後、諭すように話し掛ける姿にはこの仕事に自ら進んで就いている証の様な優しさが見えた。

「友之さん、１７時９分になったらお薬飲みましょうね。９分になったら教えてね」

佐伯友之は頭を項垂れた。彼は斉藤さんの言葉を完全に理解している。

「どうしてか理由は分からないけど、数字の９に凄い拘りが友之さんにはあるの。だからこうしてお薬を飲めるように、彼と私達の間で、約束事を作っているの。それが今は数字の９なの。９分になったら友之さんからお呼びが掛かるから、飲ませてみて下さい。その時間に直ぐに飲ませないと、飲むのを止めるから注意してくださいね」

私は斉藤さんに言われた通り、薬の準備をして時計が９分を指すの

を待った。

佐伯友之の、「あの、あの」と言う発言が気になる。昔、会っている私の事を覚えているのだろうか、それとも見慣れない介護者が来たので興味を示しているのだろうか。彼は私の顔を見ながら笑っている。

17時09分。

「あの、あの、おい、おい・・・」

大声で佐伯友之から声が掛かった。斉藤さんの言う通りこのタイミングで薬を飲ませなくてはならない。

「田中さん、薬を口に入れてあげて」

「はい」

事前に斉藤さんに教えて貰った通りに、他の職員に薬の袋の名前と時間を確認して貰い、その場で二袋ある薬を一袋にまとめる。

「おい、おい・・・」

何度も佐伯友之から声が掛かる。早くしろと急かしているのだ。

薬をこぼす事に余計に神経を使い過ぎた為、ビニール袋の開封が巧く出来ず二袋を一袋にまとめ佐伯友之の口に持って行った時には、既に予定時間の17時09分を過ぎていた。

口に薬を持っていても彼は見向きもせず、下を向いて一言、

「ばーか」

これが昔好きだった佐伯友之から掛けられた久し振りの言葉だった。確か最後に会った時掛けられた言葉は、私が「県大会頑張ってね」と掛けた言葉に、「ありがとう、またな」だった。

それから5年が経っていた。たった5年だが、彼の状況は大きく変化していた。

時間が経過して私も成長している。しかし、昔好意を寄せた人からの久し振りの第一声が

「ばーか」で、私の気持ちは深く沈んだ。

それよりも今の彼の姿に、悲しさを覚えた。

後悔は時間通りに薬を用意できなかった事で、そのことで障害を負っている彼にまた苦しみを与えてしまった事だった。手先の不器用な自分を不甲斐なく思った。

佐伯友之には、おそらく私への記憶が消えてしまっている。そう思わざるを得ない冷たい言葉だった。

冷たいと思ったのは私の感覚であり、彼にはそんな感情はおそらくないであろう。自分の拘りを貫き通しただけであり、私以外の人間に対してもそうだったらいい。私に対しての個人的な感情ではなく、その場の感情を素直に行動に現しただけなのだ。

それより以前に彼は思い障害を背負い、苦しんでいる病人なのだ。その彼の気持ちを乱してしまった私は、自分を責めるしかないのだ。ここに研修でいる間だけでも彼に優しくしてあげたい、そう考えるしかなかった。

02・初恋

「にれの木」は、郊外の静かな場所に建物はあった。50メートル離れた場所には10年前に統合で廃校となった小学校があり、そこは今「にれの木」の入所者の作業棟「ジヨバンニ」となっている。

自然が豊富に残り、窓からは広いグラウンドと奥羽連邦の山並みが鮮やかに見える。雨に打たれた窓ガラスには小さなカエルが貼りついている。

いつもは運動不足解消のために、午前中に施設から近い新幹線の高架橋の下を潜って帰ってくる30分の歩行に行くが、今日は雨のため中止となった。

そうすると各自の個別活動をする事にはなっているが、個人の意思で行動を決定できる入所者などここには1人もいない。必然的に支援者が決定することとなる。

しかし、殆どの入所者は施設の中で、思い思いに過ごす事になってしまう。彼等が何を考え、何を思い行動しているかは私には理解できない。おそらく彼等自身も理解していないであろう。明るくなれば起き暗くなれば寝るのと同じように、本能のままに行動しているのに過ぎない。

佐伯友之がもう30分以上も洗面所で左手を洗っている。右半身が完全に麻痺している彼は行動の大半が車イスでの生活だが、自分で出来る可能な行動については彼の自主性に任せている。しかしそれは彼の拘りが邪魔をして彼には普通の行動でも、周りで見ている私達には理解し難いものになっている。

「友之さん、もう手洗いをやめて食堂に移動しましょうね。あと10秒ね、10、9、8、7、6・・・」

彼が決心できるように、動機付けする為にカウントダウンを開始する。こうしないと友之は行動できないことは、世話人から話を聞いていた。

左手だけを必死に洗っているように見えるが、実は水道で遊んでいるだけかも知れない。そんなふうに見える彼佐伯友之の行動だ。

彼の車イスの後ろのポケットからハブラシとコップを出してハミガキを促した。上手く磨けない彼は既に歯槽膿漏のようにいつも歯茎から出血をしている。昔、あれ程野球で活躍していた彼なのに、歯磨きも満足に出来ない体になってしまっている。職員がハミガキを1日3回補助して磨いているが、それでもこの状態だ。

彼の車イスのポケットにはいろんな物が入っていた。

彼拘りのデジタルの置き時計、これが彼の行動の手助けの道具となっている。B5の大学ノート、彼の今日1日の行動の予定が、彼自身によって書き込まれている。

6じ おきる

7じ しょくじ・・・

そんな簡単な予定表。

それにポケットティッシュとタオル、野球の雑誌。読んでいるのを誰も見たことがないと言うが、果たして読むことが可能なのだろうか。

食堂と談話室のテレビのリモコン、これはどうしてか分からないが、彼以外にリモコンに執着している入所者はいないらしく、彼にテレ

ビのリモコン操作は任されている。

そんな彼のポケットを整理していると、とある薬品メーカーの携帯ストラップを発見した。彼は携帯を使用するわけもないが、携帯ストラップがポケットに入っていた。青のストラップで紐には白抜きで薬品メーカーの名前、そして金具には薬品メーカーのマスコットの小さな人形がぶら下っている。その人形と一緒にストラップに付いているもう一つの小さなマスコット、どこかで見たことがある。

昔私が中学生の頃、野球部など運動部で流行していたイニシャルを縫い込んだフェルトのマスコットだ。野球部の試合の前に、勝利を願うマネージャーなどが野球部全員のイニシャルを付けて作るのが流行っていた。マネージャーだけでなく、ファンの女の子などが選手のためにプレゼントするのも流行っていた。選手はそれをボストンバックなどに付けるのが流行していた。

佐伯友之のマスコットも、彼が野球をしていた頃の物だ。だがそれは特別な物だった。

Sのイニシャルが付いたそのマスコットは、当時名字しか知らなかった私が佐伯のSと詩織の共通のSを思い浮かべ作った物だった。どうして彼がまだそれを持っているのか・・・

不思議だった。どうしてそれが携帯のストラップに付いているのか・・・

確かにストラップも新しい物ではないが・・・どうして私の作ったマスコットが付いているのだろうか。それも5年も前の事だ。

「あつ・・・」

私は重大な事を思い出した。そつと手にとり確認をする。フェルトのマスコットは、縫われたそのままの状態であった。安堵、このマ

スコットの中には私の中学3年生の時の重大な秘密が隠されている。まだその秘密は公にはなっていないかった。だとすると、佐伯友之も中は確認していないことになる。手触りで中を確認する。恐らく触った人間は形を成形する型紙としか考えなかったであろうが、その中身は私にとっては重大な秘密が隠されていた。中学3年、15歳の田中詩織の人に知られたくない秘密が、今自分の手の中に戻って来た。どう処理すべきか自分でも悩んでしまう。

東北の人口10万人の小さな温泉街。高校と大学野球で街が沸いたその5年前に私と佐伯友之の別れがあった。中学の中体連の大会が始まる少し前に私と友之のちょっとした出来事があった。小学校の頃からの幼なじみの美優が私に相談があると話かけて来た。中学校では珍しくもない初恋の相談であった。その相手が佐伯友之であった。野球部のエースはいつの時代も恋の中心にいる。私は学校も別だったので佐伯友之のことは知らなかったが、それらしい噂は耳にしていた。同級生の人気者は注目を集めるらしい。学校が違って同じ市内にいれば注目の噂は耳に入ってくる。

その美優の恋の仲介役が私だった。美優の手紙を友之に渡し、佐伯友之からの貰った返事は私にとって衝撃的なものだった。

それが私の初恋、15歳になったばかりの中体連の始まる夏だった。

03・対面

「佐伯早くしろ」

「おう、わかってるって」

夏休みも近くなり、暑い日が続いていた。野球部の練習にも連日熱が入り、帰る頃はいつも真っ暗で、グラウンドのサーチライトが眩しく光る。中総体の県予選も順調に勝ち進み、友之のチームは明日の試合に勝てば決勝進出、というベスト4まで来ていた。

友之とバッテリーを組む高杉勝と、いつもの様に部室に残っていた。2人はみんなが帰った後に、部室で帰り支度をしながら明日の試合について話をしていた。

高杉とは3年間バッテリーを組み、お互いに最高の相手だと認め合っている。

去年からチームの大黒柱となった2人。今年は県予選を突破し、なんととしても東北大会に行くという目標があった。

大会前に、地元の甲子園に出場している高校からスカウトの話があったからだ。東北大会優勝が最高の結果だが、高校の野球部監督からは『二人の実力は認めているので、是非うちの高校に来ないか』と誘われた時、最悪でも東北大会には出場して結果を残してほしいと話があった。

二人にとって夢のような話であり、その話を聞いて以来、練習に夢中になり、勿論熱も入っていた。

甲子園の常連校のこの高校には、県外から外人部隊と言われる部員が大勢入部しているが地元選手は少ない。入部はするが、地元選手

でレギュラーになっている選手は少ないのが原因だと思う。それだけレギュラー争奪も困難な野球部から誘いがあったのだ。気持ちが入らないほうがおかしいくらいだ。未だに自分達にどうしてこの高校からスカウトの話があったのか、2人には不思議だった。佐伯は多少注目されてはいたが、高杉は全くその他大勢の扱い。そして、チームも強くはなかった。去年も東北大会出場は逃しているし、新人戦も決して良い成績では無かった。

しかし、千載一遇、このチャンスは絶対にものにしたいと2人共思っている。そしてできれば、高校に行ってもバッテリーを組みたいと互いに考えていた。

「佐伯先輩、高杉先輩、お先します」

部室を出て行った東が、忘れ物を取りに来た。

「おう東、明日は絶対勝つからな。たのむぞ、お前が居ないと勝てないからな」

友之は本心から、東に頼むぞと言った。バッテリー以外は全て2年と1年。その中心選手が東だった。彼なしでは、とても勝ち進むことは無理だった。東の得点圏打率は凄まじく、彼も近くの有力高校から目を付けられている。リトルリーグでも活躍した彼が我校に来た時、友之を含めチーム全体が喜んだ。一部レギュラーでない上級生は彼の入部を喜んではいなかったが、それでも監督が1年からレギュラーにしても誰も文句は言えなかった。それだけ東のバッテリーは才能があつた。2年だがバッテリーはチーム一番、いや市内の中学生の中でトップだと友之は思っている。2年でありながら、バッテリーに関してはセンスバツグンで、本当に彼が居ないと今年のチームも弱小チームで終わっていた筈だ。

「先輩、そんな事言わないでくださいよ。部員全員先輩のピッチングに100%期待しているんです。ここまで来れたのも佐伯先輩と高杉先輩のおかげです。みんなを中総体の全国大会に連れて行ってください」

「おう、まかしておけ。東北大会の決勝まで進めば出場できるからな。俺はそれしか考えていない。だが、それにはお前の力も必要なんだ。たのむぞ」

「はいっ。頑張ります。みんなで全国大会に行きましょう」

「おう、そうよ。そのつもりだ。じゃ、気を付けて帰れよ」

「はいっ。お先します」

高杉と2人で次期キャプテンと考えている東が、元氣よく挨拶をして帰って行く。3年は佐伯と高杉の2人だけだった。

入部当時10名いた同級生は、弱い野球部と陰湿な上級生のいじめで退部していった。そんな中残った2人には、東北大会が目前にあることが夢の様だった。全ては東が入部してチームのレベルと雰囲気が変わったからだった。東に上級生の2年3年も煽られて少しずつレベルが上がったのだった。

2年の東にしても今年東北大会に出場できれば、彼も来年心強くなるに違いなかった。彼もまた、自分達と同じ様に甲子園の常連校の野球部に入部を希望していた。

「佐伯、明日の試合・・・」

高杉は分かっただけだったが、友之に声を掛けた。

「明日も決勝も俺が投げる」

「そうか、頼むぞ。悔い残したくないからな。お前についていくよ」

「まかしておけて」

もう完全に暗くなったグラウンドを、2人して自転車を押してグラウンドの端を歩いていった。門を出るまで2人は、決して自転車には乗らなかった。このグラウンドは野球部だけではなく、サッカー部、陸上部など、その他の運動部も使用する共同グラウンドだった。大きな学校ではないので、野球部専用のグラウンドなど夢だった。グラウンドの端も他の運動部が使っているので自転車では危険と、校門を出るまでは徒歩の決まりだった。2人の帰る時間はいつも誰も居ない時間だったが、2人は規則を破ることは無かった。

校舎の屋上からは、早々と中総体の全国大会に出場を決めた、テニス部の応援垂れ幕が見える。友之も高杉もこの垂れ幕を見るたびに、野球部も絶対に行くと心に誓った。

そんな2人が校門へ向かって歩いていると、いつも誰もいない時間に校門の所に人影が見えた。

「まさる」

高杉には聞き覚えのある声だったが、姿は確認できなかった。

「あん・・・、詩織か？」

高杉は、暗い校門で他校の制服で誰かも判別できなかったが、声

で思い出した。

「詩織かはないでしょ。こんな美人つかまえて」

顔が見える場所まで来ると、高杉は笑いながら話した。

「おまえね、わざわざこんな所まで来て、美人とか、何、言ってるの？」

「あつ、こんばんは」

詩織は高杉の隣の友之に挨拶をした。高杉が友之に詩織を紹介した。

「こいつ、幼なじみの田中。昔って言うか、中学入学まで隣近所だったんだ。こいつの家南中の近くに家建てたんで、南中に行ったんだよ。でなきゃ、こいつが南中に入れる訳ないからな」

「まさる、中学は義務教育なの。だれでも入れるのよ。バカなあんなでも北中に入っているでしょ」

「バカ？ 俺は野球の特待生だぞ」

「あんたって、つくづくバカね。中学に野球の特待生が、いるわけないでしょ」

「そっかー。ところで詩織、こんな所まで来て何の用だ。俺にラブレターでも渡しに来たのか」

「まさる、死んだって、そんなことはありな。バーカ」

「で、用事はなんだって、聞いているの。ラーメンでも奢ってくれんのか」

「まさる、中学に入っても、全然バカね」

「それ、間違い。全然変わらない、の間違いだろ」

「ホント、つくづくアホなんだから」

そう言っていると、なんとなく以前の幼馴染みの親しみが戻って来たような感じになり、詩織も高杉も気持ちが柔らかくなった。

「明日決勝でしょ。それでお守りを渡すように頼まれて来たの」

「さすが、ファンの多い高杉選手は大変だねー」

「バーカ。あんたでない。北中野球部に佐伯友之つて言う人いるでしょ、その人に私の友達から、どうしてもって頼まれたの。私の幼なじみがいると言ったら、無理に頼まれちゃった」

「詩織は佐伯を知っているのか？」

「名前は美優から聞いて知っているけど、良く知らないわ」

「その子、美優っていうんだ。美人か？」

「あんたに関係ない。これ佐伯つて人に渡してくれるかな」

そう言って、詩織は美優から預かった友之宛のマスコットと手紙を

高杉に渡そうとした。

「ほー、ラブレター付きのお守りねー」

「で、詩織、俺のは？」

「ある訳ない」

「あちゃー、そんな不公平な。世の女性たちは俺の良さを分かっていないねー」

「あんたのバカを分かっているから、無いんでしょ。優勝したら、あるかもね」

「じゃ、優勝したら詩織がくれると言うので、ガンバツちゃおうかな」

「私はそんな事、言っていない。て言うか、あんたまだ私の事好きなの。いいかげん、あきらめろ」

詩織の話に高杉も友之も笑った。

「で、詩織は佐伯の事、どう思っているんだ」

「なんとも思っていないよ。だって、どんな人かも知らないのに」

「だってさー、友之」

「えっ」

「こいつが佐伯友之。詩織の友達の憧れの君」

「ひどい、まさる。すぐ教えてくれれば、いいのに」

詩織は今までの高杉との会話を思い出し、恥ずかしくなり下を向き友之に挨拶をした。

「あつ、こんばんは。あつ・・・挨拶はさつきしましたね。私北中三年の田中詩織です。高杉の幼なじみです」

顔が赤くなるのを感じた詩織だったが、暗くて助かったと思った。

「これで俺の役目は終わった訳？」

「もー、まさる、意地悪なんだから」

そう言っ て詩織は美優から頼まれた物を友之に渡すと、逃げるように走って帰った。

「へー、高杉、随分となれなれしいんだな」

「ただの幼なじみだよ。それより佐伯、それラブレターだろ？」

「普通、そうだろうね。マスコットはオマケだろうな」

「なんて書いてあるんだ。開けてみるよ」

「今の田中でないけど、バーカだな。だからお前には届かないんだよ。そんなじゃ、女子にもてないぞ」

「はいはい、鈍感で無神経で、悪うございました。私はもてません」

そう言いながら2人並んで歩いていると、友之が高杉に聞いた。

「さっきの子、田中って言ったよな」

「友之、ラブレターくれたの、別な子だぞ。詩織はやめとけ」

「田中が言っていたのはホントなんだろう。高杉すきなんだろう」

「そんなこと、ねーよ」

すっかり遅くなってしまったが、今日はなんか疲れもあり感じていない友之だった。さっき貰ったラブレターの所為かと思ったが、本当は手紙を渡しに来た詩織が原因だった。顔の見えない手紙をくれた相手より、目の前に現れた詩織が気になった。親しく話をする高杉が少し羨ましくなり、渡された手紙も読む気持ちになれなかった。

「高杉、マジで好きなんだろうな・・・」

高杉とは恋のライバルにはなりたくないな・・・そんな事を考える友之だった。

04・決意

研修5日目、明日で「にれの木」の実習が終わるが、ここに来て二度目のインシデントレポートを書いていた。友之の投薬の時間に遅れるのは仕方ないが、薬を口からこぼしてしまう失敗を、この研修で2度侵していた。この失敗は致命的で再発防止のため、たとえ研修でもレポート提出が義務づけされていた。

私の研修担当の斉藤さんから声が掛かった。

「どうしたの、田中さん。1度目ならず2度も失敗するなんて。現場では許されない事よ」

自分でも良く理解していた。

「田中さん、もしかして、佐伯友之さんを知っているの」

私は自分と友之の昔話を、斉藤さんに話をした。

「そうなの。冷たい言い方だけど忘れる事ね。友之さんは、もう貴方の恋愛対象にはなれないわ。それに、今は昔の貴方の事は覚えていないと思うわ。貴方がたとえ彼を好きでも、どうにもできないのよ。彼の家族だって、今は年に数回しか面会に来ないのよ」

自分でもどうする事も出来ない事は理解していた。この仕事に就こうと考えている自分に、彼を介護して行けるのではないか、と言う驕りの様な気持ちもあったが、全ては現実離れた空想でしかなかった。

ヘルパー2級に必要な研修も終了し、無事資格は認定された。研修先から就職の紹介もあるが、今尚この仕事をしていけるのか、友之の姿を見た為に迷っている。自分の心の中に何かが芽生え始めていた。

04・決意（後書き）

気持ちを残しながら、一旦ここで終了します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5623h/>

時の翳り

2010年10月8日22時11分発行